

Ⅲ. 社会への回帰

学びの森の住人たち (15)

—学校でもない学習塾でもない、
〈学びの森〉という世界が投げかけるもの—



アウラ学びの森 北村真也

4. ラウンドテーブルのテーマ

これまでのラウンドテーブルで取り上げてきたテーマは、以下のようなものでした。

(2011年度)

- ・「支援」とは何か？
- ・「見立て」をめぐって
- ・「巣立ち」をめぐって

(2012年度)

- ・「精神病理」と「社会病理」のあいだ
- ・「変化」と「変容」のあいだ
- ・「キャリア支援」と「キャリア形成」のあいだ
- ・「ラウンドテーブル」と「生活」とのあいだ

2011年度は、主に私たちが普段あたりまえに思っていることの問い直しを試みました。

「支援」とは何か？これは、アウラの森にやって来た、極めて自律的な一人の不登校の女の子のことをエピソードとして取り上げました。7人兄弟の2番目という彼女の願いは「一人で生きること」。ところが学校

という社会は、なかなかひとりになれない世界だったのです。小学校高学年くらいから、女の子同士のグループが作られるようになり、彼女は、そこで無理にグループに入って行動することが辛くなっていきました。そしてグループから離れ、一人で休みに読書をしていると、今度は先生がみんなの輪の中に入れるようにと、いらぬお節介をやいてくる。彼女からすれば一人でもいいのに、家でもみんなと一緒に、学校でもみんなと一緒に、それが苦しくてとうとう不登校になってしまったのです。その後、アウラの森へとやって来た彼女は、自律的に学習を積み上げていきます。学校は全欠にもかかわらず、定期テストは8割以上の結果を出していました。私は、そんな彼女と話しているうちに、「彼女は果たして、問題の子どもなんだろうか？」という問いが私の脳裏をよぎったのです。そしてその問いは、やがて「一人で生きたいという彼女に対する支援っていったいなんだろうか？」という問いとなって私の元へと戻ってくるのです。私はここに「支援」というコトバで一括りにしてしまうことで、私たち自身が見えなくなってしまう何かがある

のではないかと考えるようになり、その時の思いが、そのままこのテーマとなっていたのです。

「見立て」をめぐる、これはあるスクールカウンセラーから「この子はボーダーラインだからある程度はしかたない」と言われたことがきっかけで生まれたテーマでした。私はこのことを機に「診断や判定、評価っていったいなんだろう？」ということをしきりに考えるようになっていきました。30年前、私が心理学を学び始めた頃は、診断というのはドクターの領域でした。彼らは患者の病理を診断しそれに見合った薬を処方することがそのシゴトでした。ところが、この診断がやがて心理領域へと広がり、教育領域にまで入り込んでしまうことになりました。もちろんそこには、さまざまな検査法や病理の概念化が進み、それぞれの状況にあったラベルが用意されていたという背景があります。ただ精神病理や人格障害、あるいは発達課題といったことが一般化されることによって、そのコトバがラベルとして流通し、そのラベルを張られてしまうことで安易に済まされてしまうようなことも現実には起こっているように感じたのです。ボーダーラインであろうがなかろうが、その子は毎日私たちの目の前にやってくるのです。自分の今をどうにかしようとしているのです。私たちがやらないといけないことは、第一に目の前の子の今日をどうするかなんです。そんなことをお話ししながら、見立ての意味についての再検討を試みたのです。

やがて2012年に入って、私たちは「あい

だ」というコトバに注目します。不登校の問題をどこかに焦点化させ、それを本人の問題としてだけ捉えていくのではなく、絶えずもう一つの軸を想定しながら、問題そのものを面として捉えていく必要があるのではないかという思いが、私の中にあったからです。

「精神病理」と「社会病理」のあいだ、ここでは、ある中学生の男の子のエピソードを取り上げました。彼がアウラの森にやってくる間もない頃は、「ボクは高校へもいかないし、就職もしない。将来は親の年金で生活して、親が死んだら生活保護で暮らしていく。ワーキングプアになるより、生活保護をもらった方がリッチだから…」そう話していました。相手の視点が、ほとんど欠落した、かなり自己中心的な子どもでした。そんなある日、彼が毎日持ってくるお弁当、それはお母さんの手作りだったので、寸分違わず、その内容から、配列、量に至るまで毎回全く同じものであることに気がついたのです。実は、彼のお母さん自身が精神的な生きづらさを抱えていたのです。彼の行動には、極端にこだわりが強く、イレギュラーなことになると急激に不安が高まります。その結果、まわりを非難したりひきこもったりといった行動をとって、社会とのかかわりを制限しようとするのです。最初私たちは、彼の問題性に注目をしていたのですが、次第にその親の課題の存在に気がつき、さらには家族構造のいびつさに気がついていったのです。「この家族の中で彼が適応するためには、彼は問題性を身につけないといけなかったかもしれない」やがて私たちはそんな風に考えるよ

うになっていきました。そうすると、いったい問題の所在はどうなるのでしょうか？ 彼個人にあるのか、果たして両親、家族全体、あるいは社会…？ 改めて考えてみると、問題の所在とは何だかわからなくなっていくのです。だから、これがその時のラウンドテーブルのテーマとなっていったのです。

「変化」と「変容」のあいだ、このテーマの中では、子どもたちが表現する「コトバ」そして「物語」に注目しました。アウラの森で、変容を遂げていく子どもたちの多くは、その過程でいくつものコトバを残していきます。それは、過去の自分自身や過去の経験に対する再構築の過程であり、再定義の過程です。彼らはコトバを獲得することで、自分自身を大きく変容させていくのかもしれませんが。この時のラウンドテーブルでは、参加者の個人の物語が次々と紹介され、ラウンドテーブル全体が「ナラティブコミュニティ」となっていったのです。

このようにアウラの森の日々の現実が、ラウンドテーブルのテーマとなり、そのテーマそのものがラウンドテーブルのあり方に表現されていくようなことが生じてきました。「ナラティブコミュニティ」というコトバで表現されたラウンドテーブルの現実、アウラの森の子どもたちの現実、そして子どもたちに関わる私たち自身の現実と重なっていくのです。つまり、ここに不登校という現象が、やがてコトバや物語を媒介にしながら、社会そのものへと回帰されていく構造が確認されるのです。

ラウンドテーブルの参加者は、アウラの子どもたちのエピソードをもとに自分自身を振り返ります。「巣立ちをめぐって」というテーマの時も。「果たして私自身は、巣立っているのだろうか？」とベテランの支援者が問い始めるのです。つまりこの時、アウラの森の子どもたちと、この支援者は同じテーマを異なる階層で捉えていることになるのです。この瞬間、彼らのテーマがラウンドテーブルに集う大人たちのテーマと一致するのです。子どもたちのことが、他人事ではなくなった瞬間です。

「何事も自分事として考えること」これもまた重要なことです。自分事として考えることは、主体的、能動的に考えるということ、そしてそういった姿勢の中では、ひとりでの省察思考が生じていくのです。あたりまえを問い続け、自己更新していく。それはまさに、A. ギデンズの言う〈再帰的自己自覚性〉に他ならないのです。

